

# ライン河の畔から

今の仕事に着いて五年半になる。ある時、ボン市主催の国際交流会で、二人連れの日本人とおぼしき女性に出会った。日本代表团と言えば男性ばかりなのが普通なので、英語で「日本の方ですか」と尋ねると「いいえ、私共はキルギス共和国の代表です」とのこと。失礼を詫びると「日本人に似ているのですか。そう言えば、日本人って、私たちの国の辺りを経て極東に流れて行ったのよね」との宣託。

日本からヨーロッパは近く感じられるが、ヨーロッパから日本は遠い。学術外交の推進がドイツ連邦共和国の重要な安全保障政策の柱の一つになっている。学生・研究者交流のかなりの予算は外務省が出している。外務省会議ホールの演壇の背景は世界地図で、当然中央にドイツが位置している。日本は右手のカーテンを押しやらないと見えない。目立つのは、広大なアフリカ、南アメリカ、中央アジア、インドであり、此処で開かれる学術交流関係の多くの会議の参加者の割合も、それを反映して、日本が「極東」であることを実感する。

ある時、チューリッヒ工科大学の若い研究者が、はじめの日本滞在について講演するのを聴いた。「日本とスイスはとても似ている。いずれも広大な国土は持たず山ばかり、それでいて高い工業力を

小平桂一

プロフィール  
1937年東京都生まれ。日本学術振興会ボン研究連絡センター長、天文学者。「すばる望遠鏡」計画推進で1999年東京クリエーション大賞、菊池寛賞。天文学への貢献で小惑星6500番に名前KODAIRA。2001年カール・シュワルツシルトメダル。前総研大学長、元国立天文台長、東京大学名誉教授。主な著書に「宇宙の果てまで」（早川書房）、「大星遠鏡すばる誕生物語り」（金の星社）。

誇っている」。しかし「全く違うのにも驚いた。日本人は外国に行くのに海を渡る、スイス人は海に行くのに外国を渡らなければならない」と。確かに日本はユーラシア大陸の東に海を隔てて位置し、それが文化的、政治的にも強い影響を与えてきた。全く違うのは、外見的な地理だけではない。地学的にみて、スイスは古い地層地域に在る山国なのに、日本は最も活発な火山地震帯に沿って連なる列島である。古来この激しい自然の中で生活してきた日本人の特質は、英語の「レジリエンス（叩かれ強さ、回復能力）」に近いと、此の頃思うようになった。「忍耐強い」「和を尊ぶ」、そして「過去を水に流す」のも、そのための知恵と思われる。東日本大震災後の日本人の姿は、ヨーロッパでも驚嘆をもって迎えられた。

原子力を引き出すウラン原子は、宇宙化石燃料である。ウランのような重い原子核は、大量星死期の重力崩壊のエネルギーを吸って合成され、宇宙的年代を経て蓄えられる。地球化石燃料・石炭の急速な消費が炭酸ガスの過剰を齎すように、宇宙化石燃料は放射性物質の過剰を生み出す。原爆被災と原発事故を経験した日本から、人類的な「レジリエンス」の知恵を発信したものだ。

月刊  
みんぱく  
11月号日次

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>ライン河の畔から<br/>小平 桂一</p> <p>2 特集<br/>渋沢敬三と屋根裏部屋の仲間たち</p> <p>3 屋根裏部屋が輝いた日々 渋沢 雅英</p> <p>4 昭和年代のアチック 市川 信夫</p> <p>5 フィールド・サーベイのはじまり<br/>——渋沢敬三と土屋喬雄の卒論と実証主義 由井 常彦</p> <p>7 まなざしの広がり<br/>——北海道・樺太、台湾、朝鮮半島の収集資料 齋藤 玲子</p> <p>8 民俗学者の絵心 木村 裕樹</p> <p>10 似たモノさがし<br/>屋根から天空へ<br/>久保 正敏</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行<br/>狩猟採集文化のデパート<br/>——インド、アンダマン島の人類学博物館<br/>池谷 和信</p> <p>16 多文化をあきなう<br/>フェアトレードタウンの世界的広がり<br/>明石 祥子</p> <p>18 フィールドで考える<br/>世界の空気を追って<br/>谷本 浩志</p> <p>20 人間学のキーワード<br/>ホモ・モビリティス<br/>印東 道子</p> <p>21 異聞逸聞<br/>海外で起業するベトナムの若者たち<br/>野上 恵美</p> <p>22 制服の世界、世界の制服<br/>礼装としての民族衣装<br/>栗田 靖之</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|